

価値と生産価格

—Langston 論文によせて—

松 本 有 一

- I はじめに
- II Langston の所説
 ネオ-リカードイアン批判
 「新しいアプローチ」
- III Langston の所説の検討
- IV むすびにかえて

I はじめに

1984年（おそらく年末か第4四半期）に E. Mandel と A. Freeman の編集で、*Ricardo, Marx, Sraffa: The Langston Memorial Volume* ([3]) と題される1冊の本が出版された。この本は Mandel よる序文と10編の論文から成っている。小論でとりあげようとするのは第一番目に収録されている R. H. Langston の論稿 (Langston [1]) である。その理由は Mandel の序文に基づいている。

Mandel は『資本論』第3部（1894年刊）以来の「いわゆる転化問題」を回顧して、論争の「第2のターニングポイント」として Sraffa の『商品による商品の生産』(Sraffa [4]) が1960年に出現したことをあげている。Sraffa の本によって論争は新たな展開をみせ、さらに Steedman [5] が論争の分岐点をも

1) 「最初の大きなターニングポイント」は L. von Bortkiewicz の議論であるが、それが大きくとりあげられることになったのは P. M. Sweezy 以後である。Mandel は両者の間にあった重要な論者として Heinrich Dietzel と I. Rubin をあげている。cf. Mandel [2] pp. ix~xi.

価値と生産価格

たらずのである。Steedmanの本は「それまでの論争を要約し総合したのみならず、今やポスト-スラッフイアン・スクールの特徴となっている命題を力強く主張したのであった。すなわち、この論争で明らかにされたところの累積してきた不整合や諸問題は、今や極めて大きいものであり、それゆえマルクス主義価値論は全体として今やスクラップにされなければならないと主張したのであった¹⁾」。

ネオ-リカーディアンないしスラッフイアンの「このような挑戦に対するマルクス主義者の返答は、これまでやや力不足であった。教条的であるか、純粹にイデオロギー的、政治的であった」と Mandel はみている²⁾。

これに対して Mandel は、Langston の「新しいアプローチ」がネオ-リカーディアンの挑戦に答えるものと評価している³⁾。

Mandel そして E. Farjoun や A. Shaikh に対して、Langston は口頭で、価値と価格に関する「新しいアプローチ」を示したが、突然の死によって準備的な覚え書だけが残されたというのである。小論で検討しようとする Langston の論稿がそれである。「この本の他の寄稿者と同様に、彼の意図はマルクス主義経済理論に向けられた猛攻撃に対して、力強く守ろうとすることであった⁴⁾。」

Langston 追悼論文集は挙げてネオ-リカーディアンへの反批判であるが、そのうち Langston 論文だけを取りだしたのは、覚え書が残されているだけとはいえ、Mandel 等によって「新しいアプローチ (a new approach)」として高く評価されているからである。

次節で Langston 論文の概要を紹介し、第Ⅲ節でその内容の検討を行う。最後に、価値と生産価格に関する最近の議論との関連で、Langston の意図がどういう方向で評価できるか簡単にふれることにする。

1) Mandel [2] p. xi.

2) Mandel [2] p. xi.

3) Langston の経歴に関して、彼の追悼論文集であるのに上記書物にはなんら記載がない。

4) Mandel [2] p. xii.

Ⅱ Langston の所説

Langston の論文は10ページ程度の短いものである。はじめの3分の2は、ネオ-リカーディアンないしスラッフイアン（および新古典派）への批判とそれを通しての「新しいアプローチ」への方向づけで、あとの3分の1が彼の積極的な議論の展開である。

ネオ-リカーディアン批判

Langston は転化の仕方に関して「伝統的なやり方」が間違っていたというのだが (p. 7), 彼は「労働価値説の内部で定式化される問題としての有名な転化問題を、『価格』の現象および価値に対する価格の固有の関係へのわれわれの理論的理解力を強めてくれる概念 (a concept) と見ている」(p. 1¹⁾). 価値から生産価格への転化の「伝統的なやり方」とは異なる仕方であり、しかし価格の運動を労働価値説——このことばで何を意味しようとするのか必ずしも明らかでないが——のなかで理解しようというのである。

「新古典派およびスラッフイアンの見解を批判的に考察することによって、私は、観察される市場価格の気まぐれで、混沌とした、絶えず変化する性質を反映するような価格概念へと導かれたのである。そうすることで、私は現実の市場価格の絶えまない変動が一定の決った範囲に制限されることを示すよう試みるのである」(p. 1).

Langston による批判を理解するために、転化問題に関する Sraffa [5] への評価について少しのべておく²⁾。

Sraffa の本が出版された直後に、M.Dobb や R. Meek によってそれは非常に高い評価を与えられた。評価の論点は Sraffa によっていわゆる転化問題が解決されたということであった。またその後 Roncaglia や Steedman によって、生産価格論としての Sraffa の著作の意義が強調された。

1) 本節での Langston [1] への参照指示はページ数のみを本文中に記す。

2) この点に関しては、松本[7]参照。

価値と生産価格

Sraffa によって転化問題が解決されたという評価は、標準体系においては、いわゆる総計一致の二命題が（適当な規準化によって）両立するということによって¹⁾ Steedman 等はそれとは違って、労働価値によることなく生産価格を導けるところに Sraffa の業績を評価するのである。

Langston が、そしてまた Mandel が批判するのは Steedman を代表とする立場——これがネオ-リカーディアンあるいはスラッフイアンと呼ばれる——である。

Sraffa 体系における価格（生産価格）の性格に関しては Langston が指摘している通りである。つまり価格は分配関係に依存するという事。与えられた技術的条件のもとで、価格は純生産物の分配によって決まるということである。

「スラッフイアンのフレームワークでは、資本がある部門から他の部門へ流れないことを保証するために、報酬は投下資本に正確に比例する、それゆえ Sraffa のことばでいえば『毎日毎日、生産は変化しないで続いて行くのである』」（p. 2）。

これに対して、「労働価値説のフレームワークでは、価格と区別されるものとしての価値はもっぱら生産の部面で生じる。……価値が分配および交換の一般的パラメーターを決定するのである」（pp. 3~4）。

労働価値と Sraffa の価格の相違は明らかであると Langston はいう。「後者では与えられた商品、例えば自動車やコンピューターの価格は、なんらかの理由で一般的利潤率が変化しただけで大幅な下落をこうむるかもしれない。このことは、労働者みんなに最新式の機械を買わせるに十分なほど機械の価格を引下げるかもしれない。それはこれら商品の物的生産になんらの変化なしにである。他方、労働価値説のフレームワークでは、これまで高価であった商品は、一般にその生産についやされる社会的労働時間総量が一定の決まったレベルまで減少する時にのみ、平均的な労働者の手にはいるようになるのである」（p. 4）。

商品の価値（労働価値）は「技術的に支配的な生産方法のもとでその生産に

1) J.Eatwell はこの見解をとっている。松本[7]参照。

社会的に必要な抽象的労働時間の量」で決まる (p. 5). 「ひとたび価値が形成されたなら分配比率の変動は厳格に制限される. しかし交換の厳密な比率はまだ与えられはしない, なぜなら交換比率はさらにまた競争の種々の力によってそして市場の混沌のなかで決定されるからである」 (p. 5).

以上の議論から Langston は次のようにつづける. 「以上の議論から引き出される主要な推論の一つは, 与えられた商品の分配価格はその商品の価値から直接または間接に計算したり導びいたりできないということである. 生産物の自然市場価格をその価値で与える方式は存在しないのである」 (p. 5). 「このように, 代数的にも他のどんな方法でも価格は価値から計算できない. したがって, 価値を生産価格になんとかして転化させるなんらかの方式を探すという伝統的な仕方は, 間違った方へ導かれてきたのである」 (pp. 5~6).

Langston は Sraffa 的な生産価格論の批判から, あとで示される独自の価格論の展開の試みへと進んで行くわけだが, その過程で価値を生産価格に転化させる伝統的な仕方が間違っていたというのである. 批判の対象となったスラッフイアンの生産価格論は価値を前提にしないので, 伝統的なやり方のうちにははならないとみてよい. したがって, 伝統的な仕方の問題点の中味にはふれないうで, 間違っていたとだけ結論されている. 遺稿のためであろうか. 伝統的なやり方には『資本論』第3部の当該部分も含まれるのでであろうか. だが Langston が労働価値説を否定するのではないことはあとで明確に主張される.

ここから Langston の積極的な主張がはじまる. 「スラッフイアンの価格概念の決定的な弱点は, それが非常にリジッドで非現実的な分配概念, すなわち均等利潤率にまったく依存しているという事実にある」 (p. 6). ここで Langston が問題にするのは市場のリアリティ (the reality of the market) ということである. 「諸商品の価格は永遠に変動し, 諸商品のまさにその性質 (the very nature) は各期ごとに変化し, そして利潤率の完全な均等化は決して起こらない」という市場のリアリティ (p. 6).

スラッフイアンが想定するのは市場のリアリティとは全く逆で, 価格は決し

価値と生産価格

て変化しない，同一諸商品がくり返しくり返し生産されいずれもすべてが同一の利潤率を実現しているというのである。このような想定に対して Langston はつぎのようにいう。「私の知っているかぎり，現実の運動からのこのような抽象が，現実の運動についてのなんらかの興味ある性質を保存しているというような見解を支持する議論は，経済学的にも数学的にもこれまで提示されたことはない¹⁾」(pp. 6~7)。

市場のリアリティに関していえば，Langston は「分配価格理論に対して労働価値説は非常に大きな優位性を持っている」と主張する (p. 7)。Steedman の労働価値説放棄勧告に対して労働価値説の基本的教義は間違っていないというのである。

「新しいアプローチ」

これからが Langston の独自の議論である。²⁾「さて私は生産価格（あるいは略して価格）の体系を構築したいと思う。それはリジッドな諸仮定の通例の組合せに依存しないし，そのため価格形成や利潤実現のうつろいやすい性質をよりよく反映するようなものである」(p. 6)。

ある 1 期間——生産期間と呼ぶ——で完結する社会的生産を考える。その期間中に投入物は社会的労働過程で用いられ産出物に変換され，そして価格が決定される。経済を部門に分ける。³⁾各部門内の諸商品の性質は変化をこうむるので，それらを価値で一括する。各生産期間に部門 B_i で生産される商品総体はその期間ごとで決まった価格で売られる。期間 t の部門 B_i の総価格は $P_i(t)$ であらわされる。 $P_i(t)$ は一般に $P_i(t+1)$ と異なる。

次のようにして部門 B_i の単位価格 $\tau_i(t)$ を与える。⁴⁾

- 1) この点に関してはあとで言及することにした。
- 2) 以下，Langston の価格（生産価格）に関する議論——「時間に依存する価格 (Time Dependent Prices)」という表題をもっている——を要約するが，最少限のコメントを脚注で示しておく。当該ページ数はいちいち指示しない。
- 3) 部門分割の基準について説明はない。同一部門内では複数の生産物が様々な生産条件で生産されているとみることができる。
- 4) $\tau_i(t)$ は「部門 B_i の代表的商品 (a typical commodity) の単位価値あたり価格」(p. 8) とも呼ばれている。

$$(1) \quad \tau_i(t) = \frac{P_i(t)}{\Lambda_i(t)}$$

$\Lambda_i(t)$ は部門 B_i の産出物の労働価値である。¹⁾ つまり $\tau_i(t)$ は部門 B_i の価値一単位あたり価格である。一般に

$$\tau_i(t) \neq \tau_i(t+1)$$

この不等号は、価格はなんらかの商品または商品グループに付属した数量ではないことを意味する。というよりも、価格は数量の系列全体 (a whole series of magnitudes) である。この系列は最初の要素も最後の要素もない。

$$\dots\dots \tau_i(t), \quad \tau_i(t+1), \quad \tau_i(t+2), \quad \dots\dots$$

この系列の最も興味深い面はその振動であり、最も重要な情報は振動の仕方である。フォローしようとするのは、個別の生産物の価格ではなく、所与の時間 T における所与の部門での価値実現の一般的傾向である。²⁾

多くの要因がある期から次の期への価格変動を説明する。転化問題は利潤率の均等化から生ずるような影響のみを理解しようとしている。私は、その時々で価格で利潤率が実際すべての部門で均一ないし均等であるとは考えない。³⁾ こう考えることは、私の見解では、体系の真の性格に反するものであり、労働価値説にほとんど関係ない価格理論へと導くことになる。

しかしながら、価格は一般的利潤率を達成するように各期ごとに再調整されると想定しよう。⁴⁾ 一般にはこの試みは失敗する。ある時はより低い率へ、ある

-
- 1) $\Lambda_i(t)$ の計算の仕方はどこにも示されていない。全体としての投入物と産出物は必ずしも同一種類でないことが仮定されている。
 - 2) このあと価格を金 (gold) であらわした場合が示されているが、議論の本筋には関係がないので省略する。なお、 $P_i(t)$ のタームが何であるかは明示されていない。
 - 3) 平均利潤率 (ないし均等利潤率) と両立する価格はなにか、あるいはどういう条件の下ではその価格が価値法則と矛盾しないのかというのが転化問題であって、その時々で (at the current prices) 利潤率が均等になるとは、転化問題の論者も Sraffa も考えていない。Langston のいう current prices とはなにか?
 - 4) 後出(4)式参照。個別企業は一般的利潤率をいかにして知りえるのか。どういう企業や部門が自己の利潤率より高い (あるいは低い) 利潤率を実現しているのか、ということしか知りえないのではないか。

価値と生産価格

時はより高い率へと導く。 t 期の終りに第 i 部門で実現された利潤率を $r_i(t)$ であらわす。経済全体の一般的利潤率は次のようになる。¹⁾

$$(2) \quad r = \sum_i \left(\frac{K_i(t)}{K} \cdot r_i(t) \right)$$

r は剰余価値によって決定される、すなわち $r = s/(c+v)$ と想定しよう。²⁾ 経済全般でみればこれは悪い想定ではない。というのは、種々の部門での価値の価値からの偏倚は相互に相殺しあう傾向をもつからである。³⁾ それゆえ、平均貨幣利潤率は平均価値利潤率に非常に近くなるだろう。

今や振動する単位価格の適当な代数式を書くことができる。私の主な主張は、生産条件がほぼ安定であるかぎり、⁴⁾ 各部門で価格は幾分限られた範囲内で振動するだろうということである。他方、与えられた技術的ホライズンの中で、単位価格の限定された振動の系列は、労働価値のフレームワーク内での市場価格現象への理論的対応物 (a theoretical counterpart) として非常によく役に立つことができる。

a_{ij} を価値タームでの技術的係数とする。部門 B_i で用いられる総価値量は $\sum_j a_{ij}$ 。 B_i での投入の総価格は

$$(3) \quad K_i(t) = \sum_j \tau_j(t) a_{ij}$$

それゆえ、次期の価格は利潤率を均等化させるよう設定される。⁵⁾

1) $K_i(t)$ は後出(3)式で定義される。

$$K = \sum_i K_i(t).$$

- 2) (2)式で定義される一般的利潤率と $s/(c+v)$ で定義される利潤率とが等しくなるかどうかは、証明されるべきことであるし、転化問題の論点の一つでもあった。
- 3) ここでの価格は実現された価格であり、相殺されるかどうかは証明されなければならない。
- 4) 生産技術の発展があるのが市場のリアリティであるというのが、Langston のスラッフイアン批判の一論点であった。生産条件がほぼ安定というのは Langston の問題設定には受け入れられないのではないか。
- 5) (4)式中央の分子の $\tau_j(t)$ は原文では $\tau_i(t)$ となっているが、ミスプリントと思われる。

$$(4) \quad \tau_i(t+1) = (1+r) \cdot \frac{\sum_j a_{ij} \tau_j(t)}{\sum_j a_{ij}} = (1+r) \frac{K_i(t)}{\sum_j a_{ij}}$$

もし部門 B_i がその時の価格で貨幣利潤率を計算すれば、それは一般に r と異なる。しかし、すべての利潤率の平均はそれにもかかわらず r であろう。というのは種々の偏倚は相殺しあうからである。

結論。価格がある期から次の期へと同じままである必要がないことがいったん合意されるなら、平均価値利潤率に基づいた合理的な価格体系が算定されることを、上述の価格体系は示している。この体系は、価値法則と利潤率の均等化——数期間をかけて起こるが、いつもただ仮のものでしかない均等化——との間に矛盾がないことを示している。

Ⅲ Langston の所説の検討

本節では Langston の独自の議論（第Ⅱ節後半の「新しいアプローチ」）に重点を置いて検討を進めていくことにする。

まず第一に指摘しておきたいのは、証明されるべき事柄が前提されていることである。

(2)式で定義される一般的利潤率は各部門で実現された利潤率の加重平均である。(2)式は定義として理解するにしても、それが $s/(c+v)$ と等しいと想定できる根拠はない。そもそも s , v , c が Langston の体系ではいかに定義されるかは示されていない。価値の価値からの偏倚の相殺ということがいわれるが、彼の議論では価値と価格は異なったタームで表わされており、直接量的比較はできない。価値は投下労働で考えられているようだが、価格 $P_i(t)$ のタームは明示されていない。だが文脈から労働価値ではないと解釈できる。

第二番目に、Langston の体系は完結した体系であるかどうか。つまり、仮定された事柄、示された方程式から必要な結果が得られるかどうかということ

1) 相殺しあうかどうかはやはり証明されるべきことがらである。

価値と生産価格

である。あるいは諸変数の決定関係は如何ということ。

(1)式を見てみよう。これは部門 B_i での期間 t における産出物（複数）の労働価値一単位あたり価格をあらわしている。各部門内の諸商品は期間ごとに変化するということで、価格の変化の系列をみるのに労働価値あたり価格で考えることの適否は置くとしても、 $\Lambda_i(t)$ や $P_i(t)$ はいかなるものであろうか。

$\Lambda_i(t)$ は部門 B_i の全商品の総価値（投下労働）であるが、これはいかにして計算できるのであろうか。通常、技術的な（物的な）投入係数に基づく連立方程式による労働価値すなわち投下労働量の算出では、未知数の数と方程式の数は同一でなければならない。そうでなければ計算できない。ところが Langston は、同一商品がくり返し生産されると考えることは非現実的で、諸商品の性質は変化すると考えた。だからこそ価値一単位あたり価格というのを考えたのである。ところが産出物にないものが投入に用いられているとすれば、当該期間の生産技術だけでは投下労働量の計算はできない。計算できるのは投入物の労働価値が既知の場合だけである。しかし期間 t の投入物は期間 $(t-1)$ の産出物である。ということになると、生産物の価値は、投入が直接労働だけである太古の昔までさかのぼらないともとめることはできないことになる。

Langston は商品の労働価値は「技術的に支配的な生産方法のもとでその生産に社会的に必要な抽象的労働時間の量¹⁾」で決まるとのべているが、彼は具体的にどんな計算手続きを考えていたのであろうか。²⁾ (3)式で価値タームでの技術係数 a_{ij} を考えているが、 a_{ij} はいかにして与えられるのであろうか。

次に $P_i(t)$ について。(1)式にいたる説明では $P_i(t)$ は、どういう条件にもとづくかはわからないが、実現された価格、市場価格と解釈できる。しかし(4)式をみると一種のマークアップによる価格設定が考えられているようである。生産物は設定された価格で売買されると Langston は考えているのか。

1) Langston [1] p. 5.

2) $\tau_i(t)$ の系列にははじめもおわりもないと Langston はのべていた。ということは、 $\Lambda_i(t)$ の系列もはじめもおわりもないことになる。

Langston は(2)式で与えられる一般的利潤率 r を、期間を越えて一定と考えている。しかし生産条件に変化がなく労働価値が計算できたと仮定して、そして期間 t の価格 $P_i(t)$ ないし $\tau_i(t)$ がなんらかの値で与えられたとした場合でも、(2)式の r を一定不変と考える根拠はない。(2)式で定義される利潤率は $r(t)$ と考えるべきであろう。一般に $r(t) \neq r(t+1)$ 。こう考えてよいとするならば何がいえるであろうか。

(2)、(4)式であらわされるのは、実は置塩信雄氏の逐次転化と同じもの¹⁾とみることができる。置塩氏は価値どおりの販売を出発点とされたが、任意の価格を出発点にしても同じ結果が得られることは知られている。(2)式、(4)式に基づいて $r(t)$ 、 $\tau_i(t)$ の計算を順次やり直して行けば ($\tau_i(t) \rightarrow r(t) \rightarrow \tau_i(t+1) \rightarrow r(t+1) \rightarrow \dots$)、それぞれ一定の値に収束するのである。

このように読みかえることによって、「私の主な主張は、生産条件がほぼ安定であるかぎり、各部門で価格は幾分限られた範囲内で振動するだろうということである²⁾」という Langston の記述は納得できるかもしれない。だが、それは彼が当初意図したことにはなっているだろうか。これが第三番目の論点である。

Langston は「生産価格体系の構築」といっているが、実際試みようとしたのは、市場のリアリティに基づいて市場価格の変動が一定の範囲内に制限されることを示そうというものであった。すでにのべたように、市場のリアリティとして考えられているのは、(1)価格は永遠に変動する、(2)同一商品が毎期くり返し生産されることはなく、諸商品の性質は変化³⁾する、(3)利潤率の完全な均等化は決して起らない、ということである。

しかし、実際の議論の展開をみれば、市場のリアリティの(2)と(3)は保持

1) 置塩[8]第4章参照。また松本[6] 82~87ページも参照。置塩氏は消費財で測った実質賃金率を一定としているが、Langston は賃金率あるいは直接労働投入のあつかいに関しては何ものべていない。

2) Langston [1] p. 9.

3) 新生産技術、新製品の登場を含む。Langston [1] p. 4.

価値と生産価格

されていないようである。新製品が開発されてもそれが従来の生産手段（投入物）によって生産されるならその労働価値（投下労働量）は計算できるが、投入物が産出物としてあらわれないとすれば、すでに指摘したように労働価値の計算で困難が生じることになる。Langston はあとの方で「生産条件がほぼ安定であるかぎり (so long as production conditions remain approximately stable)」とややあいまいな表現を用いることによって、市場のリアリティの(2)を事実上放棄している。

次に利潤率の均等化は起らないという市場のリアリティの(3)について、(4)式をみれば、産出物の価格は(2)式で定義される利潤率 r を実現するよう設定される。そしてこのように設定された価格が実現されれば、すべての部門で同一の利潤率が達成されることになる。ただし、この時投入と産出に同一種類の商品があっても、一般に異なる価格を持っている。($t+1$) 期の投入は t 期の価格で評価されているからである。しかし、($t+1$) 期の価格で投入を評価し直せば利潤率の均等性はくずれのかもしれないが、($t+2$) 期ではまた、全部門で同一利潤率が達成されるよう価格設定がなされる。このような手続きがくり返されれば、生産条件が変化しないかぎり、価格および利潤率は一定値におちつくことは置塩氏によってすでに論証されている。生産条件が安定していれば、Langston のような価格の永遠の振動でなく、一定値への収束がもたらされるのである。

Langston は生産条件が「ほぼ安定」というような表現を用いているが、(3)、(4)式で a_{ij} の変化は考慮されておらず、事実上は生産条件不変が仮定されているとあってよい。

以上のように、(1)式から(4)式の定式化でみるかぎり、Langston の意図は、彼の主張にもかかわらず達成されていないといわざるをえない。

IV むすびにかえて

マルクスがいうように生産価格が市場価格変動の中心であるのなら、市場価

格の運動から生産価格へ、さらにまた価値へと接近して行く方法が考えられる。高須賀義博氏のいう下向的接近の深化である。¹⁾ 現実の価格の変動から生産価格へ接近するという Langston の試みはこの方向を目指したものと評価できるかもしれない。ただ数学的定式化には彼の意図はほとんどいかされていなかったし、定式化自体不十分な点、不明確な点があった。

しかしながら、一定の生産技術条件のもとで均等な利潤率が成立し、生産価格が成立している状態を想定することは、Langston のいうほど意味のないこととは思われない。というのは、生産価格は再生産の条件であり、均等利潤率、生産価格の成立している状態は一つの「理想的平均」と考えてよいからである。

このような生産価格が、片や現実の市場価格と、片や価値（労働価値）とどう関連づけられるかは依然残されている課題である。²⁾ (1985. 7. 11.)

(関西学院大学経済学部助教授)

参考文献

- [1] Langston, R. H., "A New Approach to the Relation Between Prices and Values", in [3].
- [2] Mandel, E., "Introduction" to [3].
- [3] Mandel, E. and A. Freeman (eds.), *Ricardo, Marx, Sraffa: The Langston Memorial Volume*, Verso, 1984.
- [4] Sraffa, P., *Production of Commodities by Means of Commodities: Prelude to a Critique of Economic Theory*, Cambridge University Press, 1960 (菱山泉・山下博訳『商品による商品の生産——経済理論批判序説』有斐閣, 1962年).
- [5] Steedman, I., *Marx after Sraffa*, NLB, 1977.
- [6] 松本有一「『価値の生産価格への転化』の問題点」『経済学雑誌』第76巻第6号, 1977年6月.
- [7] 松本有一「スラッファ理論と転化問題——批判的考察」『経済学論究』第32巻第3号, 1978年11月.
- [8] 置塩信雄『マルクス経済学——価値と価格の理論』筑摩書房, 1977年.
- [9] 高須賀義博「転化論の展望」『経済研究』第27巻第2号, 1976年4月.
- [10] 植村博恭「抽象的労働論の可能性」『経済評論』1985年7月号.

1) 高須賀[9] 169ページ.

2) 価値を規定するところの抽象的労働をどうとらえるかがこの課題の一つの論点になると思われる。抽象的労働論の最近の新たな潮流に関しては植村[10]参照.